

お父さんとの話し合い

大阪 六年 明雄

十一月二十五日土曜日の七時ごろ、テレビを見ているとお父さんが仕事から帰ってきた。ぼくは、

「学校でやってた『ユガンスン』の勉強終わったで。」

と言った。お父さんは、

「そうか。」

と服をぬいだ。

『ユガンスン』というのは、一九一九年、朝鮮の独立運動の時、中心になってたたかって死んだ、朝鮮のジャンヌダルクといわれている少女の話だ。

ごはんまで時間があったからぼくは、

「先生が、おうちの人にも感想聞いといてと言ってた。」

と言うとお父さんは、

「ほんじゃあ、最後まで、本読めよ。聞いたるから。」

と服を置きに二階へ行った。その間にぼくは、『ユガンスン』の本を用意して、お父さんを待った。お父さんはすぐに下りて来て、

「ビール持ってきて。」

とテレビの音を下げたから、いすにすわった。ぼくは急いでかんビールを台所から持ってきて、お父さんの横にすわった。それからぼくは、

「読むで。」

とすぐに読み始めた。ぼくは、その場面その場面を思いうかべながら、ていねいに読んだ。お父さんは、テレビを見たり、ときどきぼくを見たりしながら聞いていた。ぼくが読んでいる間にお母さんは、つくえにばんごはんの用意をしていた。

読み終わってすぐぼくはお父さんに、

「日本人って悪いなあ、朝鮮の土地を取ったり、前の王様を殺した上に、ユガンスンのお父さんとお母さん、それに最後にユガンスンまで殺したんやで。」

と言った。するとお父さんは、急にぼくの方に体を向き直した。それから、まゆ毛の間にしわを寄せて、顔をゆがめておこったように、

「あのなあ、一部だけ見ると確かに悪いけど、日本だけが朝鮮にいたんとちゃうねんで。ロシアやドイツ、アメリカもその当時朝鮮が弱かったから、朝鮮にいたんや。」

とゆっくり言った。ぼくは、

「でも朝鮮の人から見たら、自分の国が日本から差別されてると思うやんか。」

と言った。お父さんは、

「ほんなら、日本だって、アメリカに原爆を、広島と長崎に落とされて、何十万人もなくなってるんからおんなじやんか。」

とぼくの顔をじっと見た。ぼくは、

「でも、日本人が朝鮮の国を取ったのは事実やんか。」

と負けずに言った。お父さんは少し考えてから、

「お前は、まだ歴史を知らんからそんなことゆうてんねん。だいたい、そんな『ユガンスン』の勉強みたいなんを、小学校でやること自体まちがってるし、あんたらにはむずかしい。中学校ぐらいになってからの勉強でわかるねんからな。」

と言って、もくもくとごはんを食べ始めた。ぼくは、

「関東大震災の時、朝鮮人がぼう動を起こすって、デマを流したんも日本人やで。」

と言ってみた。お父さんは食べるのをやめてはしを持ったまま、

「それは、お前みたいになこわがりやうただけや。」

と言って、またごはんを食べ始めた。

ぼくは、もう言うのをやめた。学校で『ユガンスン』の勉強の後、ぼくたちは社会の時間に、日本と朝鮮の歴史で、関東大震災の時の朝鮮人のぎゃく殺のことや、創氏改名や、強制連行のことも習った。ぼくはお父さんが言うのがわからないでもないが、日本が朝鮮に対して悪いことをしてきたということをお父さんが認めないのは、反対に、ぼくが勉強したようなことをお父さんは知らないからだと思った。しかしぼくはこれからどうしたらいいのかとちょっと心配になった。

ごはんの後、お父さんがふろに入ったときぼくはお母さんに、

「お母さん、お父さんはあんなふうに言ってるけど、お母さんはどう思う。」

と聞いてみた。お母さんは、

「ユガンスンってかわいそうやなあ。お母さんは、日本人が悪かったと思ってるで。」

と言った。ぼくは少し安心した。

(指導 増田俊昭)